

ロシア風俗百景 J. A. Atkinson and J. Waker, *A Picturesque Representation of the Manners, Customs, and Amusements of the Russians* (V. 1-3, London, 1803-04, 1812) について

100 scenes of Russian way of life (быт) at the end of the 18-th century  
J. A. Atkinson and J. Waker, *A Picturesque Representation of the Manners, Customs, and Amusements of the Russians*. V. 1-3, London, 1803-04, 1812

坂内徳明

BANNAI Tokuaki

## 1.

エカテリーナ二世の治世下にあった18世紀後半のロシアを9歳のイギリス人少年が訪れた。イギリスで版画家として活躍していた叔父がロシアに招聘されたのを機に、彼に連れられた少年が訪露を果たしたのは1784年のことである。その後、彼はほぼ18年もの長き歳月をロシアで暮らし、1801年(1802年とも)にイギリスへ戻るが、滞在中に観察した多くの日常の光景をスケッチに残していた。帰国後、彼はそのスケッチを100枚の作品として完成させ、そこに叔父による解説文を付した豪華本を作り、時のロシア皇帝アレクサンドル一世に捧げる形で刊行したのである(1803-04年)。

本稿の目的は、第一に、この版画アルバムの内容の概略・紹介を行う。そのことを通して、この画文集が18世紀後半-末ロシアの日常生活のディテールを理解する上で貴重な資料であることを明らかにしたい。さらに、この画集が例外的な出版物ではなく、実はその当時、同様のヴィジュアル・テキストがさまざまな視点や手法によって続々と生み出されていたことに着目し、この時期の文化史的背景について若干のコメントを試みる。

ちなみに、この貴重なアルバムは一橋大学古典資料センターの収蔵になるものである(1812年刊行の第二版だが、第一版との異同はない)【図版1、2】。

## 2.

本稿で取り上げるアルバムの著者名ならびに正式なタイトルは下記のとおり(以下で「ピクチャレスク」と略称することがある<sup>1)</sup>)。

Atkinson J. A. and Walker J., *A Picturesque Representation of the Manners, Customs, and Amusements of the Russians, in one hundred coloured plates ; with an accurate explanation of each plate, in English and French. In three volumes in 1 Bd. London : Bulmer, 1803-1804.*

---

<sup>1</sup> ここで言うピクチャレスクとは、同時代に流行していた美術・文学様式としての「ピクチャレスク」(それについては、鳥山(2000; 2005)が詳しい)とはまったく別物である。タイトルの *picturesque representation* は、文字通りの「絵画表現・表象」くらいの意味。

著者二名の中で、絵を描き、ファースト・オーサーとなったのが上に述べた少年アトキンソン（刊行時 28 歳）であり、後者ウォーカーがその叔父（1760?-1822）である。後者については、イギリス本国で知られた画家・メゾチント（網目銅板）技法の版画家であったことから、その生涯と仕事に関して若干の調査・紹介がされている<sup>2</sup>。それに比してアトキンソンに関する情報はきわめて少ないが、現在まで明らかになっていることを記しておく。

ジョン・アウグストゥス・アトキンソンは 1775 年に生まれた<sup>3</sup>。月日、誕生地、両親等に関しては記載がない。1784 年、ウォーカーに連れられてロシアの地を踏んだことは先に記したとおりである。その際、ウォーカーの妻メアリーと娘が同行したが、ロシア入国以前のウォーカーとアトキンソンの関係は叔父・甥ということ以外、詳細は不明である<sup>4</sup>。また、ウォーカーが訪露した目的に関しても、彼の版画家の名声がかテリーナ二世の耳に届き（当時、最大のヨーロッパ通であった A. B. クラーキンがその情報を提供したともいう）、招待されたという以上のことは明らかでない。ロシア滞在中のウォーカーの活動については A. クロスの調査に詳しいので、それに譲るが、ロシア入国と同時に「官房付版画師」（кабинета Ее Императорского Величества гравер）となり、1786 年 12 月から芸術アカデミー準会員、1794 年 9 月付けで芸術アカデミー正会員、さらに同年、顧問官（советник）にもなった。彼が自身の絵画・版画（特に、皇帝・皇族・貴顕たちのポートレート）制作に多くの時間を当てたのは言うまでもないが、あわせて、エルミタージュに収蔵されている絵画作品の複製制作や、エルミタージュへの有名人訪問の際の案内に尽力した。同時代のロシア人画家との関係に関しても多くの交流があったはずで<sup>5</sup>、この点はこれからの調査と研究によって明らかになるはずである。ウォーカーが残した絵画作品数は、これもクロスの調査によれば、訪露までに 28 点、ロシア滞在時に 51 点（アトキンソンの他、18 世紀ロシアの著名な画家 M. シバノフ、Ф. С. ロコトフ、B. Л. ボロヴィコフスキイ、Д. Г. レヴィツキイ、А. П. ロセンコらの絵を版画作品化したものを含む【図版 3】）、帰国後 12 点を数えるという<sup>6</sup>。革命前の版画・絵画史研究の第一人者である Д. А. ロヴィンスキイによれば、ウォーカーの版画は「ずば抜けた職人仕事の美と優美さで知られ、ロシア肖像画のフォルダーの中でもっとも榮譽ある、見事なページとなっている」<sup>7</sup>という。

---

<sup>2</sup> Cross (1993) に詳しい。それを紹介した白倉 (1995) も参照。ただし、クロスがウォーカーの誕生年を 1748 年としているのは間違いである。エカテリーナ二世、ポチョムキンをはじめとした肖像画作品の多くは、Незабываемая (1997: 65-70) に見ることができる。

<sup>3</sup> 彼の生涯のアウトラインに関しては、Иткина (1997)、Cross (1993) による。トレチャコフ美術館で開催された展覧会「忘れられぬロシア 17-19 世紀イギリス人が見たロシア人とロシア」の素晴らしいカタログ（Незабываемая, 1997）のアトキンソン関連個所の著者もイートキナである。ただし、ロヴィンスキイ (1886-1889: 614-615) によれば、アトキンソンは 1775 年生まれ、1829 年以後に死去、ロシア滞在は 1799-1805 年とされる。

<sup>4</sup> アトキンソンの配偶者となった女性はイギリスから同行した娘（メアリーの連れ子）であり、アトキンソンはウォーカーの死んだ姉妹の息子ではないか、というのがクロスの推測である。ちなみに、ロシア滞在中にウォーカー夫妻の間に生まれた娘キャサリンは生後 6 週間後に死亡（1791 年）、息子のチャールズ・ジェイムズも二歳で亡くなっている（1786-1788）（Cross, 1993: 5-6）。

<sup>5</sup> イギリスのロイヤル・アカデミーで学び、宮廷版画家でエルミタージュの版画管理者であったガヴリル・スコロドゥーモフ（1755-1792）は、明らかにウォーカーと交流があったはずであるが、資料が見出されない。クロスは「二人の間にはおそらくなんらかの競合関係があった」（Cross, 1993: 8）とする。

<sup>6</sup> Cross (1993: 187-192)

<sup>7</sup> Ровинский (1895: Т. 1. 130)

ただし、1802年にロシアから帰国する途中、海難事故に遭遇し、多くの銅板が失われたのは、かえすがえす惜しい。

ウォーカーとアトキンソンの関係は叔父・甥から、ロシア入国後には義理の息子となった。アトキンソンがウォーカーの娘と結婚したのである。アトキンソンはこの叔父で義理の父親の弟子として、仕事の全面的な補佐の役をこなすとともに、自身の作品制作を行うことになる。

アトキンソンのロシア滞在中の具体的事実に関しては、ほとんど知るところがなく、この点は新資料の発見も含めて今後の研究に待たねばならない。わずかに、芸術アカデミーで短期間学んだこと、その技術の完璧さから女帝ならびにパーヴェルの保護を受けたこと、最初、エルミタージュで、後にパーヴェルのためにミハイル城で働いたことが判明しているだけである。また、ウォーカーが宮廷内での聞き書きをまとめた噂話・小話集『パラミシア』（1821）<sup>8</sup>に、「義理の息子」の言及が見られる。それによれば、おそらく1790年頃の復活祭に、当時15、16歳のアトキンソンはエカテリーナ二世の命を受けてアレクサンドル・ナルィシュキン（1726-95）邸へ向かう。彼の肖像画を描くように、その際には「彼の家柄の良さを示すように」との指示を受けてのことだったが、画家は屋敷のバルコニーから臨める復活祭の式典を背景にナルィシュキンの姿を入れた絵を描いた。自身の部屋のバルコニーに坐り、あごの下に大きなダマスク織のナプキンをつけた彼は若き画家に対してきわめてまじめに、時にはジョークをとばしながらポーズをとった。後に女帝はナルィシュキンにその絵を彼の正餐の間に飾るようにと下賜し、アトキンソンには十分な報賞を与えたという<sup>9</sup>。

ロシア滞在の生活よりはほとんど分からないが、アトキンソンが残した絵画作品に関してはその概略が知られている。これは、叔父がエカテリーナ大帝の宮廷内で仕事をし、そのサポートならびに自身の仕事をしてきたことからすれば当然である。

作品をテーマ別にあげるならば<sup>10</sup>、ロシア史・文化をテーマとしたカンバス作品「ルーシの洗礼」「ママイの戦い」（両者とも、ペテルブルグのミハイル城のために制作）。「ジャン・モロー将軍の死」「ネヴァ川上の氷山からの滑走」（1792）（ロシア・ミュージアム蔵）。一連の肖像画として「馬上のパーヴェル一世」（1797）、A. B. スヴォーロフ将軍（ともに、ウォーカーによって1797年に版画作品となる）、アレクサンドル一世（1813年にスクリーヴェン、1814年にウォーカーにより版画）、ニコライ・シェレメーチェフ伯爵（クスコヴォ蔵）、A. 3. ヒトロヴォ伯爵その他のポートレートを残した。

イギリスに帰還してからの作品としては、ここで取り上げる「ピクチャレスク」の他、「ペテルブルグのパノラマ」（科学アカデミー展望台からの光景、5枚もの、1805-07）がある。1815年には画家のA. デービスとともにワートルローへ向かい、かつてそこで起きた有名な戦闘場面を描くが、作品は1819年に展示会、J. バーネットにより版画となった。

また、彼はイラストレーターとしても活躍している。W. ミラーの著作『大ブリテンの海軍・陸軍その他さまざまな衣装の絵画描写』（1807）の挿絵、『7-16世紀グレートブリテンとアイルランドの古代衣装セレクション』（1814）の挿絵の他、多くの仕事が残されているが、それは衣装風俗の描写として、今なお民族学＝歴史学的な意義を有する。また、「ロシアの忠誠さ

<sup>8</sup> クロスによる復刻版『パラミシア』（Cross, 1993）については、白倉克文氏の書評がある（「ロシア史研究」No.57（1995））。

<sup>9</sup> Cross（1993：105）。このときに描かれた肖像画は現存しない。

<sup>10</sup> Ровинский（1888：Т. 3, № 7, 8；Т. 1, № 189, № 574）。その他に Собко（1896）、Иткина（1997）を参照。

とヒロイズム」(1816)といった1812年戦争をテーマとした優れたカリカチュア作品も残した<sup>11</sup>。

1808-1813年にはイギリス水彩画協会会員として活動し、1829年まで毎年、イギリス王立芸術アカデミーへ歴史風景画を送った。1831年以降、ロンドンで死去したことが分かっている。

### 3.

「ピクチャレスク」は、上記タイトルにも明らかなように、全部で100枚の絵(腐食銅版アチント加工、水彩による色付)と各絵への解説文を収録する。大きさ34×48センチメートル、総皮装丁、1冊豪華本だが、下記の目次を見るとおり、その中身は全体で3巻から構成される(絵の点数は、第一巻33点、第二巻34点、第三巻33点)。

この画集を制作する仕事をアトキンソンは1802年にイギリスに帰国後すぐに取り掛かったが、そのためのスケッチは、むろん、ロシア滞在中になされていた。近年、美術史研究者のエレーナ・イートキナ(歴史博物館上級研究員)によって、歴史博物館ならびにロシア国立図書館等に収蔵されている資料(原画に該当する鉛筆画、水彩画102枚その他)を精査し、それらの比較・検討により「ピクチャレスク」の成立過程の一部が明らかになっている<sup>12</sup>。

また、アトキンソンが制作した版画には、ウォーカーの手になると考えられる(序文にそのことが記されている)解説文が付されているが、目次(絵のタイトル)と解説文とを比較すると、そこに異同が見出される場合が多い。このことは、「ピクチャレスク」全体をどのようなテキストとして考えるべきかという問題として後述する。

以下に、「ピクチャレスク」の内容目次をあげる。画集冒頭の目次と解説文は、イギリスで出版されたことから、英語とフランス語で記載されているが、中には、ロシア語をそのまま転写したものも見られる(下線で示した)。外国語に翻訳不可能であることからすれば、これは仕方がないだろう。また、このトランスクリプションの際に、ロシア語表記が現代の一般的な表記と異なるのも、18世紀末の近代ロシア文章語形成期にあったロシア語の発音と綴りの状態を示すこととして、さらに調査すべき問題群を含むものである。ただし、ここではテキストにある通りの表記をそのまま残した。

#### 第一巻

1. Voizok 2. Swaika 3. Pleasure Barges 4. The Droshka 5. Finland Sledge
6. Milkwomen 7. Bashkirs 8. Lapland Sledge 9. Summer Kibitka, with a Courier
10. Market of Frozen Provisions 11. Winter Kibitka 12. Babki 13. Corn Barks 14. Cozacks
15. Horn Music 16. Cozack Dance 17. Hack Sledge 18. Fetching Water, and Rinsing Linen
19. Ice Cutters 20. Carriage on Sledges 21. The Russian Peasant, or Boor
22. Charcoal Harks 23. Bathing Horses 24. Gypsies 25. A Kaback 26. Russian Girl
27. Winter Carriers 28. The Village Council 29. Finn Begger 30. Katcheli
31. Russian Galliot 32. Summer Carriers. Tjaliagi 33. Isba

#### 第二巻

---

<sup>11</sup> このカリカチュア作品は *Незабываемая* (1997: 227) に見ることができる。

<sup>12</sup> *Иткина* (1997).

34. Pilgrims 35. Ukraine Drovers 36. Zbitenshik 37. Children's Ice Hill 38. Brick and Lime Lighters 39. Government armed Barks 40. Russians Soldiers 41. Finland Girl going to Market 42. Ice Hill 43. Hussars 44. Summer Fishery 45. Finland Wood Barks 46. Winter Fishing 47. Ladoga Fishing Boats 48. Common Sledge Kibitka 49. A Merchant's Wife 50. Russian Merchant 51. Rafts of Timber 52. Finland Horse 53. Lumping on a Board 54. Cozack Officer 55. Court Caleche 56. Yaeger, or Huntsman 57. Skittles 58. Public Festival 59. Hay Merchants and Market 60. Monks 61. Female Peasant 62. Baba, or Old Woman 63. Boutoushniki, or Watchmen 64. Stone Carriage 65. Finland Carts 66. Russian Sailors 67. Tartar Camp

### 第三卷

68. Tartas catching their Horses 69. Plough 70. Smolenski Carts 71. Woman's Winter Dress 72. Russ Baths 73. Wolf Hunt 74. Boxing Matches Kulatshnoi Boë 75. Cooper 76. Kalatchnicks 77. Race Course 78. Gardeners 79. Dvornick 80. Russian Canoe 81. Village Amusement 82. Wrestling 83. The Swing 84. Fish Barks 85. Golubetz 86. Baptism 87. Russian Village 88. Ceremony of Marriage 89. Burial of the Dead 90. Metropolitan 91. Russian Priests 92. Wood Barks 93. Russian Farm Yard 94. Sorting Hemp and Flax 95. Polish Dance 96. Fins bringing Fish to Market 97. Consecration of the Waters 98. The trotting Race Horse 99. Nuns 100. A noble Tscherkesse

全体の構成を見れば、ここには秩序立った順番がなく、主要な画題にまとまりをつけようとする明確な意図や意識的なスキームも見られない。画家が無作為に配列したとしか思われないのである。その意味からすれば、画集全体のめざすもの、かりにそれをイデーと名付けるならば、画集のイデーやテーマを見出そうとするのは、そもそも無駄であるかもしれない。

もっとも、画家のまなざしと関心が「傾向」を持ち、画題がいくつかのグループからなることも明らかである。クロスはそれを「人々のタイプ」、「町と田舎の光景」、「遊戯・ゲームと娯楽」、「教会とそこでの儀式」、「交通手段」という5つに分け、叔父の手になる解説文のみを再版・再録している（ただし、100点すべてではなく63点）。参考までにその番号を列挙しておく（数字の順番はクロスに従った。また、クロスの番号表示には間違いが散見されるので、それを本稿筆者が訂正した番号を\*で示した）。

- ・「人々のタイプ」21\*、61、62、26、50、49、71、6、40\*、66、63、36、76、79、75\*、78
- ・「町と田舎の光景」87、93、33、28、25、73、94、18、72、59、46\*、10、19
- ・「遊戯・ゲームと娯楽」58、15、77、30、42、37、81、85、2、12、57、53、83、74、82
- ・「教会とそこでの儀式」90、60、99、91、34、97、86、88、89
- ・「交通手段」9、11、4、17、20、3、22、13\*、84、31

ここでクロスがあげたグループはごく印象的であり、テーマというよりも題材の大まかな分類である。「人々のタイプ」という枠組み、そして目につくグループとして「遊戯・娯楽」や「乗物」をあげていることは、画家の関心の所在を考える上で適確と思われるが、「教会の儀式」にウエイトを置いたことには多少の違和感を覚えるものがある。たとえ画家がキリスト教徒として、ギリシャ正教の儀式に大きな関心を示したとしても、画集全体として見たとき、彼がより「民衆的」あるいは「異教的」な部分に惹かれていたことを無視できないからである。



むろん、こうしたクロスによる仕分けを補足し批判的に修正・厳密化を図ること、コメントを付すことは十分可能である。その際、クロスも指摘するとおり、絵と解説文との不整合・非対応の点も合わせて考えなければならないだろう。ただし、それらはどれも意味ある作業であるとはいえ、「ピクチャレスク」の全体をいかなる一つのテキストとして理解するか、というより大きな問題群を考えることにはつながらないと思われる。

#### 4.

「ピクチャレスク」をロシア文化史構築のために有効なテキストとして活用するには何が必要だろうか。以下で、絵が描き出した場所（トボス）と時間、ヒトとモノとコトという5本の概念軸を立てて絵と解説文の双方のテキストがはらむいくつかの問題群を検討してみよう。

テキストに描かれ、記述される時間系としては、一年のサイクル全体、季節の巡り、四季、春・夏・冬、年間の主要な祭り・式典・歳時儀礼（キリスト降誕祭、復活祭、春祭り）、人生儀礼（洗礼、婚姻、葬式）等の時間軸が見出される。特に、冬の厳寒の中での労働と娯楽、春の訪れとその爆発ぶりに着目した光景は数多い（10、19、30、83等）。さすがに長期間をロシアに滞在した画家ならではの、と思わせ、彼がロシアの寒暖と生命力の振幅、そしてロシア流ハレとケのサイクルを十分理解していたことが説得的に伝わってくる。

場所に関してはどうか。全体としてペテルブルグ関連の場が多いのは、やはり仕事と住まいの場所であったからだろう。頻繁に出入りをしてきた宮廷のあるペテルブルグ市内各所を中心に、広場（58、97. 宮廷前広場）、街頭、川岸（19、22、51）のみならず近郊・郊外（6）<sup>13</sup>も選ばれている。ネヴァ川水上（3）、ラドガ湖上（47）も見逃されていない。むろん、ペテルブルグと特定できない場面も多く、地方へも足を運んでスケッチしたことは間違いない。行商の売り声が響く路上や町角（36、76）、立ち話や休憩のための街道脇や「辻」（6、3他）、遊びのための空地（2、12他）、市場（10）<sup>14</sup>【図版6、7】、教会内部（86）、墓地（89）、公衆浴場（72）、居酒屋（25）、村の広場（30、81、83、85）、畑（69）、農家室内（33）と社会のありとあらゆる場所に画家は目を向けた。

モノという視点から見てみる。「ピクチャレスク」は、ロシア人の衣食住をいかに描写しているのだろうか。

食物そのものは描かれていないが、行商人の売る食べ物（76. カラーチと呼ばれる上等なパン）や飲み物（36. ズビーテニと呼ばれる蜜湯）、ペテルブルグ市内の川で獲れて販売される魚の種類の記述（84）<sup>15</sup>はある。食卓や食事の場面はない。

住居が、衣服と同様に、すべての場面の背景として、数多く描写されていることは言うまでもない。帝都ペテルブルグはじめ町の各種建物とその室内、村集落の建物については枚挙にいとまがない。

---

<sup>13</sup> 市東部のオフタの地から市内へ牛乳の行商にやってくる女性の姿は18-19世紀に好んで描かれ、記述された風物だった【図版4、5】。

<sup>14</sup> 「凍った食材が並ぶ冬の市場。家畜や猟の獲物、魚は、北は北氷洋、南はカスピ海をはじめとした遠隔地からペテルブルグへ運ばれる。特に帝都で最大の市場が開かれるのはクリスマス直前で、凍った食材は屠殺されたものと比べて30%ほど廉価である」。

<sup>15</sup> ネヴァ川では20種類の鮭が獲れるほか、14種の魚やキャビアが売られていると記される。

服装について見れば、民族、男女、階層、職業の別が明確になるように描き分けられている。その描写の意味はウォーカーによる解説文の解説とともに、同時代の他のヴィジュアル資料ないし文字資料との比較・検討も合わせてさらに調査すべき課題となるだろう。

一点指摘しておきたいのは、アトキンソンの画集の刊行時期が「ロシア・コスチューム」の時代（E. A. ヴィシユレンコヴァ<sup>16</sup>）にあっていた点である。すなわち、P. S. パラスの著作（1773-88、1799-1801、ドイツ語）やJ. G. ゲオルギの著作（1776-80、全4巻、ドイツ語）が西欧のみならずロシア国内でも知られ、そのことが大きな契機となって、多民族帝国ロシアが民族学（厳密に言えば、前民族学）の大きな関心の的となっていた。その際、服装・衣装の差異は民族区別（さらに「帝国表象」）にとってきわめて有効かつ最大の指標となった。人間の形質学的特徴や言語等々による民族「分類」が始まる直前の時期に、もっとも目につきやすい衣装はきわめて有効な「記号」として機能していた。だからこそ、この時期の多くの博物学・民族誌的著作に「民族衣装」の挿絵が頻繁に掲載されたのである<sup>17</sup>。ただし、後述のとおり、非ロシア民族にたいするアトキンソンの関心はさほど大きくない。だが、そのことを了解した上で、改めて画集全体を検討すると、上に記したとおり、男女、階層、職業等々のさまざまな社会的指標を理解する上でアトキンソンのテキスト（絵ならびに文字の双方）が重要な資料であることは確かである。

農具・漁具をはじめとする各種生業のための道具、娯楽・遊戯用の各種道具・装置についても豊富な描写を見出すことができる。例えば、「プラウ」と題された69（解説文も参照）、ブランコ・観覧車・跳ね板といった遊具・設備<sup>18</sup>についても入念に描写されている。

交通手段となる各種乗物についての描写と解説記述は詳しい。ある意味で、クロスが述べるまでもなく、モノの中で画家がもっとも関心を向けたのがロシアの多種多様な乗物だったとしても、おそらくは間違いのないだろう。クロスがあげたりストを補う意味からも、乗物の描写の番号をあげると、1、3、4、5、8、9、11、13、17、20、22、27、31、32、38、39、45、47、48、55、64、65、70、79、80、84、92。おそらくは、馬車、櫓、船、舟、そして馬くらの一

---

<sup>16</sup> Вишленкова, 2011 ; Гл. 1.

<sup>17</sup> 本稿筆者が一橋大学名誉教授中村喜和氏から譲られた稀覯本 *Costume of the Russian Empire*, illustrated by upwards of seventy richly coloured engravings. Dedicated, by permission, to Her Royal Highness the Princess Elizabeth. London, 1803. も、そうした時代の典型的な出版物の一つである（奇しくも、「ピクチュアレスク」初版と同年に刊行）。中村氏によって記されたこの貴重本の「由来書」（2002年10月8日付）を、長くなるが以下に引用する。「本書はもと亀井高孝氏（元第一高等学校教授）の収蔵本であった。同氏が校訂した漂流民大黒屋光太夫の聞き書きである『北槎聞略』には、ロシア帝国領内に住むさまざまな民族の名が挙げられているが、その民族名称を確認する目的もあって、愛書家として知られた亀井教授によって第二次大戦前に購入され（Book Store, MATSUMURA, Kanda のシールが貼られてある一引用者）、鎌倉二階堂の亀井邸に珍藏されていたものである。1970年代にその亀井邸は火災で全焼したが、本書は被災を免れた。同教授の没後、本書は長男で国語学者の故亀井高孝氏（元一橋大学教授）の手許におかれていたが、氏の生前、そのゼミナールで薫陶を受けたロシア研究者中村喜和（元一橋大学教授）が、1980年代に恵受を受けたものである…」また、亀井、中村両氏は、本書が著名なゲオルギの著書と考えられておられるようだが、残念ながら、同書に著者名は書かれておらず、同書の絵は、東京大学東洋文化研究所所蔵の「別版」(?)の絵とは明らかに異なるものと思われる。同書の無署名序文には、絵の一部がK. V. ミューラーの「興味深い記述」とP. S. パラスの「きわめて貴重な旅行記」その他の著作から借用されたことが記されている（Harding, 1803 : Introduction）。

<sup>18</sup> 「ブランコ台の両側に若者の男女が立ち、誰が一番高くまでふれるかを競う。残りの者は台に坐り、歌ではやす」（83）。ロシアの「ブランコ」の諸相については、坂内（1991）に詳しい。

般名詞で表現されるだろうこれらは、画集の中では、絵として適確に描き分けられ、解説では、ロシア語表記も含めて入念に説明されている。陸上か水上、使用される季節と目的（旅行、運搬、娯楽等）、乗降者の階層、走行距離等からそれぞれがきわめて具体的に描写ならびに記述されるのである。

馬車・橇として、「冬の旅行用箱橇」(1)<sup>19</sup>、「一頭立て屋根なし軽四輪馬車 (дрожки)。御者は肩章を付け、そこに番号があることから警察により公認される」(4)、「ラップランド人の橇」(8)<sup>20</sup>、「夏用幌付馬車キビートカ」(9)<sup>21</sup>、「冬用幌付馬車キビートカ」(11)<sup>22</sup>、「普通のキビートカ」(48)、「農民の出稼ぎ御者による小橇」(17)<sup>23</sup>、「4、6、8頭立、ばね付四輪乗用馬車」(20. экипаж)、「夏・冬の荷馬車」(27、32)<sup>24</sup>、「スモレンスクあるいはポーランド式荷馬車」(70)等<sup>25</sup>。また、馬がコサックをはじめとした軍の行進や戦闘準備に用いられる光景(14、43)や、「馬を水浴させる」(23)、さらには、馬そのものが絵筆の的となったこと(52、98)<sup>26</sup>も指摘しておこう。

水上の交通手段として、「最大のものは100トン以上を運ぶ穀物輸送用パーク型帆船」(13. Барк)、「石炭船」(22)、「ペテルブルグークロンシュタット間を航行するガレー船」(31)、「石、レンガ、石灰運搬船」(38)、「フィンランド湾の木材・乾草運搬船」(45)、「石材運搬船」(64)、「ロシア式カヌー」(80)、「船荷が薪300ファゾムとなる場合もある材木船」(92)等。

物資運搬・旅行・移動・労働用、夏冬の季節別、水陸別、乗る者の民族・階層別といった各種乗物の区別が正確に描き分けられている。画家のロシア経験の「深さ」を示すのと同時に、乗物という道具・機具の細部に拘泥したアトキンソンの感覚と画才を見るにふさわしい。

ヒトに関して言えば、ナロードのタイプ、男女、階層、服装（民族衣装）、労働、非ロシア民族が主な指標となるだろう(5、6、7、8、14、21、24、26、27、29、34、35、40、41、43、49、50、52、54、56、59、60、61、62、63、66、67、68、69、71、75、76、78、79、84、90、91、96、99、100)。上下階層、職業・身分・位、男女、年齢、子供・女性の正確な描き分けがあり、移動・放浪民への関心も忘れられていない。また、非ロシア民族への注目は貴重だが、全体としてそれほど多くない（フィン、バシキール、ラップランド、ジプシー、ウクライ

---

<sup>19</sup> アトキンソンの表記は *voizok* だが、19世紀半ばに出版された有名なダーリの辞書をはじめとして、現代までの表記では *vozok* *возок*。

<sup>20</sup> 「彼らの橇はきわめて単純で、一本のロープと首あてがあるだけで、それを鹿の足に通し、ポールを使わずに橇に結わえつけてある。乗り手は長い棒で鹿に指示する」。

<sup>21</sup> 「ロシア人が旅行する際の一般的な乗り物として、どの駅亭でも見かける」。

<sup>22</sup> 「*Kibitka* という言葉は、タタール人の言葉では、テントあるいは小屋を意味する。ロシア人の感覚では、もっとも小さくて軽い旅行用の馬車であり、小さな動くテントに似ている」。

<sup>23</sup> 解説によれば、ヤロスラヴリをはじめとした遠くからモスクワ、ペテルブルグ等の都市に御者として出稼ぎに来る農民が走らせる安く使いやすい橇。市警察の規則が及ばないこともあって、料金は決まっていないが、全体に「とても穏当」で、1マイル10コペイカという。

<sup>24</sup> *Tjaliagi* と表記されているが、現代では *tjeljegi* *телеги*。

<sup>25</sup> 革命前におけるロシアの馬車の多数のヴァリエーションに関しては、数多くの文献があるが、とりあえず参考になるのは、*Ганулич* (1989)、さらに *Федосюк* (1998 : Гл. 12) (これには、邦訳がある。鈴木淳一、岩崎恵、和田沙本子「フェドシューク『古典作家の難解なところ あるいは19世紀ロシアの生活百科』(その12)」「文化と言語」第71号(札幌大学外国語学部紀要、2009))。

<sup>26</sup> 「この種の馬はロシア独特である。全体に小型で、胸がとても深く、頭と耳が小さく、地面につくほどのたてがみとふさふさした尾を有する。そして、驚くべき早さで、例えば20マイルを一時間以内で走ることもある。そのため、辻御者 (*извозчик*) や橇御者に気に入られ、市中で使われている」。



ナ、タタール、ポーランド、チェルケス、コサック5、7、8、24、29、35、41、67、68、96、100)。ここには、当時のロシア帝国内に居住する多民族に対する「民族学的まなざし」は見られないと言ってよい。アトキンソンは、上記のパラスやゲオルギの著作の存在を知る立場にあったし、民族「差異」を服装描写で表現することの同時代的な傾向と意味も分かっていたはずである。しかしながら、彼の関心は民族ではなく、むしろナロード（庶民・民衆）とその生の具体像にあった。後述するコトの労働の場面であげると、農夫や漁民、兵士、聖職者はもちろんのこと、路上の行商人や放浪する職人、「巡礼」(34)、「使用人」(79. дворник)<sup>27</sup>や「見張り」(63)、「フィン人乞食」(29)【図版8、9】に注がれた画家のまなざしは、きわめてリアルで、かつ温かく、大きな共感にあふれている。

画集に見られるコトの光景は実に多種多様である。労働、各種遊戯・娯楽、スポーツ、式典・儀式・儀礼と祭り、移動（行進）、休息と祈り、各種集まり（市・村会）といった日常生活のきわめて多くの場面が描写されている。その場面の「分類」そのものは可能であるとしても、次節に述べる「ピクチャレスク」の「資料化」とその方向性に資する形で考えたいことから、以下では、いくつかの気付いた細部のみに触れておく。

労働の場面は農耕に始まり、狩猟、牧畜、漁、行商、運搬、建設、家事等々と多岐にわたる。その時期や場所も的確に描かれている。「きわめて単純なロシア式プラウ」を使っている農作業(69)、農家中庭での家畜の世話(93)や「麻と亜麻の選別、乾燥と保存」(94)をはじめとして、町・市場へ荷物や商品を運ぶ様子(5、6、10、13、59、96等)、「水汲みと亜麻濯ぎ」(18)、「保冷用水の切り出し」(19)、ベテルブルグ市内の川岸での生簀を使った魚商い(84)【図版10、11】、「ウクライナの牧童」(35)、「漁業」(44、46、47)等々、枚挙にいとまがない。人や物資を運ぶ多くの御者の様子（上述した各種乗物の個所）、路上での行商の光景(6、36、76)、「渡り職人」や季節出稼ぎ(75. 桶屋<sup>28</sup>、78. 菜園丁<sup>29</sup>)といった風物も見える。さらに、農村の屋外で立ち話をしているかに見えるが、実はロシアの伝統的な村会（ミール）の場面も欠かせない【図12-13】。それらはどれもきわめて具体的で精緻に描かれている。同時期のヴィジュアル資料に、こうした場面をこれほどまで数多く、かつ緻密に描かれたものを見出すことは可能であろうか。

遊びも多種多様な場面が描写される。スヴァイカ（свайка）と呼ばれる釘打ち遊び(2)「雄牛の踵の小さな骨を使うことから、バプキ（Бабки）と呼ばれる小骨遊び」(12)【図14、15】やロシア版スキトルズ(57. кегля)の解説文には遊び方までが記され<sup>30</sup>、場合によっては自国イギリスの遊びとの比較民俗学にまで及んでいる。「子どもたちの氷の滑降」(37)、「謝肉祭週間の氷の丘」(42)、「復活祭期の見世物小屋と回転木馬」(30)、「村の娘や若者たちによる

<sup>27</sup> 「ロシアの家庭に欠かせない使用人は水汲み、庭掃除、照明等の家事を仕事とするが、また、警察に登録され、火事の際の手助けや街頭の掃除、大きな祭日時に家のイルミネーションをすることになっており、その義務を怠ると警察により罰を受ける」。

<sup>28</sup> 「ロシアの桶職人は、手斧以外の道具を使わぬロシアの大工と同じく、きわめて巧みな技の持ち主であり、鉈と金輪を手に、家々を巡り、桶やその他の家庭用品を修理して回る」。

<sup>29</sup> 「毎年春、主にロストフの多数の農夫が、菜園作りのためにベテルブルグを訪れ、借りた土地で野菜を栽培し、それを市民に供給する菜園丁（огородник）。冬の間、ロシアほど野菜と果物が保存されている国はヨーロッパにはない」。

<sup>30</sup> ロシアの伝統的な遊戯に関して、ソ連時代には研究史がほとんど成立しなかったと言っても過言ではない（1930年代初頭までを除く）。しかし崩壊前後から、一気に注目を浴びている。とりあえず、遊び方については Григорьев (1994)。

遊びと娯楽」(53、81<sup>31</sup>、83)等、また、ロシア式ボクシングや舞踏(74<sup>32</sup>、82、95)、「Golubetz と呼ばれるロシアで一般的な男女求愛のダンス」(85. голубец)、コサック・ダンス(16)、ネヴァ川氷上の競馬(77<sup>33</sup>)、「ヴェニス Gondola に準えられる、歌や楽器演奏を伴う上流階層向けペテルブルグの遊覧船(баржа)」(3)にも絵筆が及ぶ。画家(と叔父)はそれらの遊びや娯楽に進んで参加したのだろうか。楽器練習場面(15)<sup>34</sup>も何気ない日常の観察によるスケッチである。入浴も、当時もすでにロシア人の大きな娯楽とレクリエーションであったとすれば、公衆浴場にも画家の目が注がれたのは当然である(72)。

式典や儀礼に関しては、教会内での洗礼(86)、婚礼(88)、死者埋葬(89)、宮廷広場での1月6日の禊式(97)等が描かれているが、さほど多くはない。やはり、外国人から見れば、ロシア正教ならびにその「しきたり」は理解しにくかったのか、あるいは、教会が主催するさまざまな儀式そのものは描写対象とはならなかったのか。むしろ、全体として見れば、民衆の「異教的」生活文化の諸相がより強く意識され、それに画家のまなざしが向けられていると考えられる。

## 5.

アルバム「ピクチャレスク」は、ロシアのごくありふれた日常と風俗をきわめて鮮やかに切り取って見せた版画文集の逸品である。それは、共著者のロシア滞在の長さばかりか、彼らの豊富な情報量と抜群の観察力ならびに描写・記述力によってもたらされたと言って過言でない。「エテカリーナ大帝治世下のロシア人の生活小百科」とするクロスの指摘は正しい。

もっとも、画集に対するいくらかネガティブな見方もある。人物描写の際に見られる技法、あるいはスケッチ的な絵画性(「芸術上の未完成さ」<sup>35</sup>)が、どこか「ロシア的」ではない印象を与えることから、この画集が、当時、広く知られていたにもかかわらず、ロシアの後世の画家たちに及ぼした影響は目立たなかったというのである<sup>36</sup>。しかし、そこで念頭に置かれている影響とは、弟子の形成や後の時代のロシア内部における反響といった限定的・直接的な影響

---

<sup>31</sup> 「日曜日や祭日に、村娘たちは最高の晴れ着で着飾って歌と踊りに興じる。イギリスの場合とは違い、そこに男たちが加わることはめったになく、踊り手の誰もが歌う」。この記述には、ロシアの民衆の祭りにおける女性の役割、ならびに歌唱をめぐる重要な指摘がある。

<sup>32</sup> 「ロシア人は自分たちの拳闘試合を kulatshnoi (ママ) бое (курачный бой) と呼ぶ。イギリスのものとは比べて簡単なのは、自分の体をガードせず、相手をアトランダムに狙っているように見えるからである。だが、そのように戦うのには大きなスキルと勇気が必要である。また、両サイドに分かれた多くの人々により行われる場合もある」。

<sup>33</sup> 「ロシアのジェントルマンは好んで競走馬を所有する。競走馬はネヴァ河上を、冬の氷上を走るの、王宮の向かいの場所には競走用に馬場の柵が作られる。それは素晴らしい光景で、特に日曜日祭日には多くの見物人が集まる」。

<sup>34</sup> 「ホーン音楽(роговая музыка)の練習風景。この種の音楽、ないしは楽器がロシアで生まれたのは今から50年ほど以前で、ボヘミア生まれの宮廷楽師マレシ氏の発明による。それは完全な生きたオルガンである。楽団は少なくとも25人以上、40人から構成される」。ロシア音楽史に関する貴重な記録であることがわかる。

<sup>35</sup> Гончарова, 1987: 79.

<sup>36</sup> Гончарова, 1987: 79-80. 後世への影響を示すものとして、アトキンソンの絵「村娘」が陶器の皿に図柄として使用された例がある。現物はモスクワのクスコヴォ・ミュージアムに収蔵(Незабываемая, 1997: 234)。

を示唆しているにすぎない。むしろ、現代のわれわれが18世紀後半から19世紀初頭のロシア社会、特にその日常性を表象する上で、このテキストがもたらす「像」はきわめて豊潤なものであることの確認の方がより重要となるはずである。

忘れてならないのは、この画文集が、第一に、画家がロシアの日常場面を観察・スケッチしていた18世紀70年以降の「ロシア民衆文化の発見」の時代の産物であったこと、そして第二に、偶然の機会を得てロシアを訪れた外国人によって生まれた、孤立した例外的作品ではないことである。

第一の点に関しては、別に述べたので繰り返さない<sup>37</sup>。18世紀後半・末から19世紀へとという時代の動きは、インテリゲンツィヤの誕生、それに対応する形で、ロシア・ナロードとその文化がその意義を見出されていくことに集約されていた。それは民俗学＝民族学「前史」として大きな転形期であり、民俗学史を構築する上で重要なアспектである。時代精神は、インテリゲンツィヤとナロードを結び、かつ分断する民俗学的まなざしの中にあつた。そうした時期のただ中で、アトキンソンは民衆・庶民としてのナロードの生きる具体的諸相をもっとも鮮やかに、リアルに描いた。厳しく過酷な自然・社会条件の下、懸命に働き、語り合い、遊び楽しみ、戯れるナロードの姿を目にして、画家は立ち止まる。その筆にロシア・ナロードのエネルギーと力への限りない共感と期待を込めたのである。そして、こうしたナロードの姿と「かたち」に強く惹かれたのは、彼だけではなかつた<sup>38</sup>。

そのこととの関わりで、第二の点について言えば、ロシア文化の歴史から見て、18世紀後半から末、さらに19世紀初頭にかけての時期は、まさしく「ヴィジュアルなもの」への関心がきわめて高まっていく時代に当たっていた（例えば、エカテリーナ二世による「帝国の可視化」を想起）。同時期のロシアは、まさしく、多種多様なヴィジュアル・テキストが陸続と誕生していく時代であり、そのことは多くの現象によって確認することができる。例えば、博物誌・旅行記のイラストレーション、地主屋敷内の日常生活スケッチ<sup>39</sup>、ルボーク、文字・絵入り本、「大衆文学」等々の出現はその証左である<sup>40</sup>。

その際、何よりも大きな役割を果たしたのは、「時代の寵児」たる画家・版画家の活躍である。それは、ロシアへやって来た外国人版画家・画家の系譜（18世紀半ば以降のJ.-B. レプランス、A. ダリシュテイン、X. ロート、V. エリクセン、I. Ya. メッテンライター、そして、18世紀末のアトキンソン、X. G. ハイスラー）を形成し、この外国人たちから大きな影響を受けながらも、ロシア「固有の」絵画・版画を生みだしていった人々の出現をもたらした（M. シバノフ、И. А. エルメニョフ、Г. И. スコロドゥーモフ、M. M. イヴァノフ、A. ヴィシニャコフ、И. М. トンコフ、С. Ф. シチュドリン、Е. М. コルネエフ等）<sup>41</sup>。その際、画家たちにとってもっとも中心的なジャンルとして要求されたのは肖像画と風俗画であつた。時代は、ロシア的「個」の表象と「風俗の成立」を求めていた。

<sup>37</sup> 坂内（1994：第1章）で述べた。

<sup>38</sup> この点に関して信頼できる基本的モノグラフとして Комерова（1961）は現在もなお意義を失わない。

<sup>39</sup> Корнилова（1990：Гл. 1）。

<sup>40</sup> 坂内（2006：39-45）。

<sup>41</sup> 18世紀後半のロシア風俗画の「成立」に関しては Брук（1990）がきわめて大きな成果である。肖像画と風俗画の二つをあげたが、風景画も加えるべきかもしれない。むしろ重要なのは、ロシアでは、これら三者がほぼ同時期に「一気に」成立したことである。さらに言えば、ここで言う「成立」は、下村寅太郎氏の「風景画の成立」に着想を得たものである。

アトキンソン以後について若干触れておく。1812年の対ナポレオンとの戦争後、ロシア国内の文化的昂揚は社会の急速な「風俗化」をもたらした。都市の街頭は、急速かつ巨大な都市化とスラム化の中で、散策や移動、出稼ぎの人々で充ち溢れ、その光景を切り取るべく多くのヴィジュアル作品が生まれた。その一例は、19世紀初頭のペテルブルグ街頭の庶民とそのタイプを描写した画文集『幻燈』である<sup>42</sup>。暦・雑誌・ルポーク、牛乳、パン、ピローク、蜜湯、肉、花や胸像、食器、履物等々の品物が路上で販売され、それらを買うべく行商人とかけあう多様な庶民（洗濯女、床屋の徒弟、女中や左官、煙突掃除人、御者、伊達男、旦那衆、出稼ぎ等々）が鮮やかに描き出されるのである。

最後に、ヴィジュアル資料のテキスト化に関して一言述べておく。前節で、アトキンソンの100枚の絵（ならびに解説文）を時間とトポス、ヒト、モノ、コトといった枠組みによって多少とも強引に並べ替え、パッケージ化したことには、実は、隠された構想があった。それは、この画集をある種の「絵引」（渋沢敬三、宮本常一氏）とすることができないか、というものである。むろん、アトキンソンのみが確実に信頼しうるテキストでないことは明らかである。「絵引」の精度を高め、より活用可能な形とするためには、少なくとも18世紀半ば以降に描かれたテキスト（西欧ならびにロシアの画家・旅行者たちが残したスケッチ、風俗画を中心とした絵画、ルポーク等々をはじめとした多くのヴィジュアル資料）を網羅的に整理し、文字テキストとの照合も欠かさず行った上でデータベース化することが求められるはずである。その際、17世紀以降に多く登場する西欧人のロシア訪問者たちが残したイラストレーション<sup>43</sup>も視野に入れること、さらには、場合によっては、18世紀以前の各種年代記に見られる「挿絵」・イラストレーションも参照すべきであると考えられる。そのことは、膨大な作業が求められるとはいえ<sup>44</sup>、ロシア文化史の構築、特に18世紀以降のロシア文化の形成と展開を解明する上で必須の課題となるだろう。

（一橋大学特任教授）

---

<sup>42</sup> Волшебный фонарь или зрелище (1817-18) この『幻燈』（復刻版）については、本稿筆者による書評がある（「窓」（ナウカ社発行）70号、1989）。

<sup>43</sup> 17世紀のオレアリウス、マイエルベルグらによる旅行記とその挿絵の意義が再認識されるべきと考える（例えば、マイエルベルグの旅行から1世紀半後に詩人プーシキンは、ラヂーシチェフによる発禁の著『旅』を手にして両首都間を旅したが、その際、マイエルベルグの農家に関する記述を想起し、ロシアがまったく変化していないと書きつけたことの意味の考察等）。その際に考慮すべきは、西欧人のロシア旅行記の「歪み」を間違いではなく、優れたエスノグラフィのテキストとして読もうとしたPoe (2000)の方法論である。

<sup>44</sup> ロヴィンスキイが、きわめて「19世紀的に」であるが、着手したと考えられる。『ロシア民衆版画』巻末索引の項目を参照。

## 参考文献

- Алексеева (1961) Алексеева Т.В. Бытовой жанр // История русского искусства. Т.7, М.-Л.
- Брук (1990) Брук Я.В. У истоков русского жанра. XVIII век. М.
- Вишленкова (2011) Вишленкова Е.А. Визуальное народоведение империи, или «Увидеть русского дано не каждому». М.
- Волшебный фонарь или зрелище (1817-18) Волшебный фонарь или зрелище Санкт-Петербургских расхожих продавцов, мастеров и других простонародных промышленников, изображенных верно в кистью в настоящем их наряде и представленных разговаривающими друг с другом, соответственно каждому душу и званию. Факсимильное издание, М.,1988.
- Гаврилова (1983) Гаврилова Е.И. Русский рисунок XVIII века. Л.
- Георги (1799) Георги И.Г. Описание всех обитающих в Российском государстве народов, их житейских обрядов, обыкновений, одежд, жилищ, упражнений, забав, вероисповеданий и других достоынопамятностей. СПб.
- Ганулич (1989) Ганулич А.К. «То в кибитке, то в карете ...» Русская речь, 1989-4.
- Гончарова (1987) Гончарова Н.Н. Е.М.Корнеев (1780-1839). Из истории русской графики начала XIX века. М.
- Григорьев (1994) Григорьев В.М. Народные игры и традиции в России. М.
- Иткина (1983) Иткина Е.И. Русская серия гравюр А.Дальштейна 1750-х годов. Памятники культуры 1981. Л.
- Иткина (1997) Иткина Е.И. Новое о творчестве английского художника Д.-А. Аткинсона. Страницы художественного наследия России XVI - XX веков. М.
- Комерова (1961) Комерова Г.Н. Сцены русской народной жизни конца XVIII - начала XX веков по гравюрам из собрания Государственного Эрмитажа. Л.
- Корнилова (1990) Корнилова А.В. Мир альбомного рисунка. Русская альбомная графика конца XV III - первой половины XIX века. Л.
- Незабываемая (1997) Незабываемая Россия. Русские и Россия глазами британцев. XVII - XIX век. М.
- Решетов (1982) Решетов А.М. Произведения русских художников XVIII -начала XX в. как источник для изучения культуры и быта населения Ленинграда. Старый Петербург. Л.
- Ровинский (1886-1889) Ровинский Д.А. Подробный словарь русских гравированных портретов. Т.1-4. СПб.
- Ровинский (1895) Ровинский Д.А. Подробный словарь русских гравированных портретов. Т.1-2. СПб.
- Савинов (1982) Савинов А.Н. И.А.Ерменев. Л., 1982.
- Собко (1896) Собко Н. Аткинсон // Русский биографический словарь. Т. II. (Reprinted 1962. New York)
- Федосюк (1998) Федосюк Ю.А. Что непонятно у классиков, или Энциклопедия русского быта XIX века. М.



- Штукатурова (1990) Штукатурова Н.М.(автор-составитель русского текста) Костюм народов России в графике XVIII - XX веков из фондов Государственной центральной театральной библиотеки. М.
- Abbey (1972) Abbey J.R. Travel in aquatint and lithography 1770-1860 from the library of J. A. Abbey. A bibliographical catalogue. Folkestone. 2 v.
- Atkinson and Walker (1803-04, 1812) Atkinson J.A. and Walker J. A picturesque representation of the manners, customs, and amusements of the Russians, in one hundred coloured plates ; with an accurate explanation of each plate, in English and French. In three volumes in 1 Bd. London.
- Cross (1993) Cross A. Engraved in the memory. James Walker, Engraver to the Empress Catherine the Great, and His Russian Anecdotes. Edited and Introduction by Anthony Cross. Oxford / Providence. 1993.
- Fontanel (2006) Fontanel B. Daily life in art / translated from the French by Liz Nash. New York.
- Harding (1803) Costume of the Russian Empire. Illustrated by upwards of seventy richly coloured engravings, humbly inscribed by Edward Harding. London, 1803.
- Picturing (2008) Picturing Russia : explorations in visual culture / edited by Valerie A.Kivelson and Joan Neuberger. Yale University Press.
- Poe (2000) Poe M. T. "A people born to slavery" Russia in early modern European ethnography, 1476-1748. Ithaca and London
- Russian narrative (1994) Russian narrative and visual art : variety of seeing / edited by Roger Anderson and Paul Debreczeny. University Press of Florida.
- Tekstura (1993) Tekstura : Russian essays on visual culture / edited and translated by Alla Efimova and Lev Manovich. University of Chicago Press.
- Travels (1990) Travels in 18th century Russia. Costumes, customs, history. London.
- 渋沢 (1984) 渋沢敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『新版 絵巻物による日本常民生活 絵引』平凡社
- 下村 (1995) 下村寅太郎「オランダにおける風景画の成立について－精神史の一省察」『下村寅太郎著作集 10 美術史・精神史論考』みすず書房、1995
- 白倉 (1995) 白倉克文「ロシアにおける J. ウォーカー、C. クレアモント、および G. ボロー－ロシア・イギリス文化交流史の一側面」『東京工芸大学芸術学部紀要』Vol.1
- 白倉 (2001) 白倉克文『近代ロシア文学の成立と西欧』成文社
- トドロフ (2002) ツヴェタン・トドロフ『日常礼賛 フェルメールの時代のオランダ風俗画』塚本昌則訳、白水社
- 鳥山 (2000) 鳥山裕介「絵のような美を求めて－18 世紀末～ 19 世紀初頭ロシア文化史より－」SLAVISTIKA (東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報) X V
- 鳥山 (2005) 鳥山裕介「19 世紀前半のロシア文学とピクチャレスク概念」『19 世紀ロシア文学という現在』(北大スラヴ研究センター 21 世紀 COE 研究報告集)
- 坂内 (1991) 坂内徳明「ロシアのブランコ その「解釈」をめぐって」『ロシア文化の基層』日本エディターズスクール出版部
- 坂内 (1994) 坂内徳明「ロシア民俗学史再考」一橋大学博士論文

坂内 (2006) 坂内徳明 『ルポーターロシアの民衆版画』 東洋書店  
宮本 (1981) 宮本常一 『絵巻物に見る日本庶民生活誌』 中公新書

**【追記】**

校了後、本テーマに関連して E. A. スクヴォルツォヴァによる最新の仕事があることを知り、2014年3月にペテルブルグで同女史に会うことができた。入手した修士論文概要(2012)によれば、ロシア・イギリス美術交流史におけるアトキンソンとウォーカーの活動の意義の解明を目的とした研究であることがわかった。

貴A-B225

A  
PICTURESQUE REPRESENTATION  
OF THE  
MANNERS, CUSTOMS, AND AMUSEMENTS  
OF  
**The Russians,**  
IN ONE HUNDRED COLOURED PLATES;  
WITH  
AN ACCURATE EXPLANATION OF EACH PLATE,  
*IN ENGLISH AND FRENCH.*

---

IN THREE VOLUMES.

BY  
JOHN AUGUSTUS ATKINSON AND JAMES WALKER.

VOL. I.

---

LONDON:  
PRINTED FOR JAMES CARPENTER, OLD BOND STREET; AND JOSEPH BOOKER, NEW BOND STREET.  
BY W. BELMER AND CO. CLEVELAND ROW.

1812.

【図版 1】

TO  
HIS IMPERIAL MAJESTY  
ALEXANDER I.

EMPEROR AND AUTOCRATOR OF ALL THE RUSSIAS.

SIRE,

*THE present Work, which we have the honour to dedicate to YOUR IMPERIAL MAJESTY, is the same which you have had the goodness to approve, when first offered to your examination, and which you have been pleased most graciously to permit us to publish under your Patronage and Auspices.*

*May we be likewise permitted to seize the opportunity of informing the World, SIRE, that when YOUR IMPERIAL MAJESTY is so condescending as to reward, to such an eminent degree, those talents which the ILLUSTRIOUS CATHERINE encouraged in their infancy, it is not with a view but to the effect of evincing that you wish to tread in those steps which led her to fame and immortality.*

*We have the honour to be, with the utmost veneration of*

YOUR IMPERIAL MAJESTY,

SIRE,

*The most obedient,*

*most respectful, and*

*most obliged Servants,*

JOHN AUGUSTUS ATKINSON.

JAMES WALKER.

*London, May 1st, 1803.*

B

【図版 2】



【図版3】 J. ウォーカー「旅行着の女帝エカテリーナ二世」(1787  
M. シバノフの絵によるメゾチント版画 国立歴史博物館蔵)

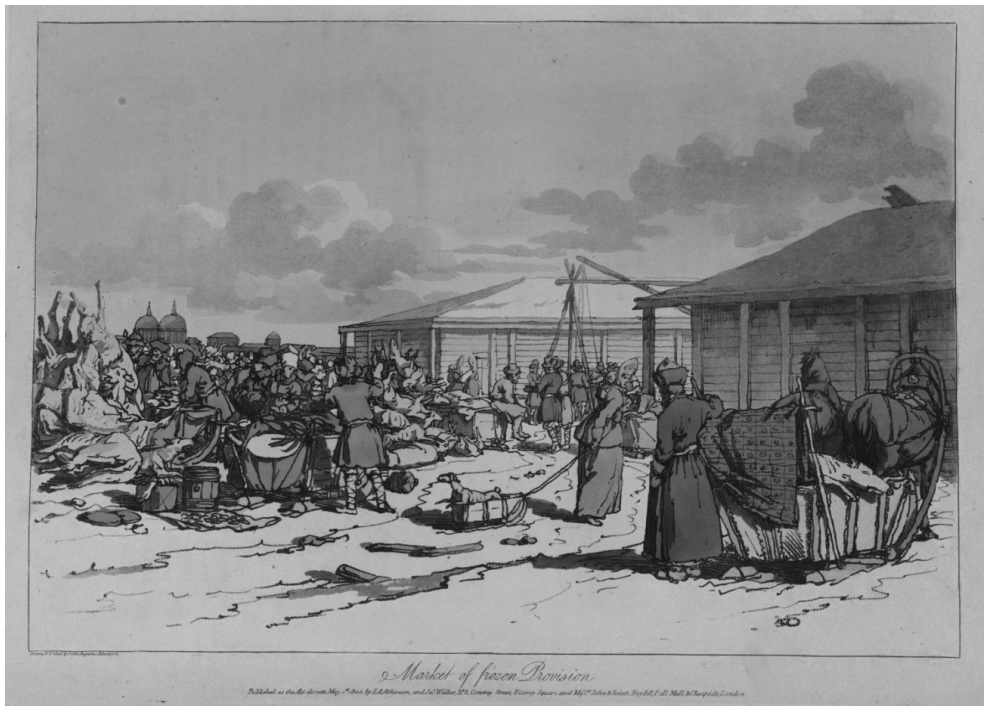




【図版4】 J. A. アトキンソン  
(6)「オファタの牛乳売り女性」



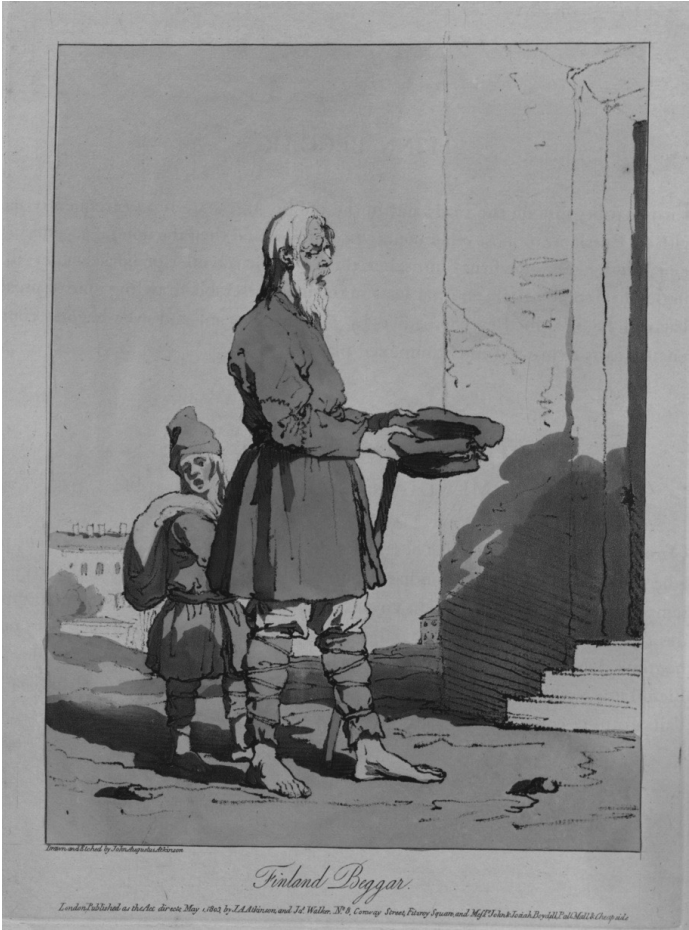
【図版5】A. ダルシュテイン「牛乳売りの女性」(1750年代半ば 国立歴史博物館蔵)



【図版6】アトキンソン (10) 「凍った食品を売る冬の市場」



【図版7】Ch. G. H. ハイスラー「冬の市場」(1805 国立歴史博物館蔵)



【図版8】アトキンソン (29)  
「フィン人乞食」

【図版9】И. А. Эрмленов「女乞食と手を引く少女」(1764-1765 水彩画 エルミタージュ蔵)







【図版10】アトキンソン (96) 「鮮魚販売」



【図版11】ハイスラー「鮮魚販売」(1805 国立歴史博物館蔵)



【図版12】アトキンソン (28)「村の集会」

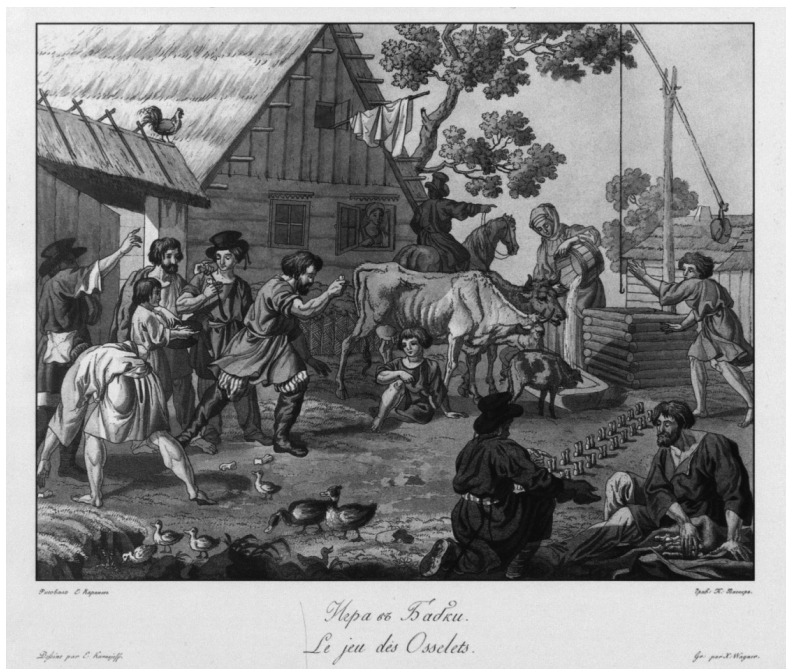


【図版13】アトキンソン「村の集会」(1804 鉛筆画 国立歴史博物館蔵)





【図版 14】アトキンソン (12) 「バーブキ遊び」



【図版 15】X. ワグナー 「バーブキ遊び」 (1812 国立プーシキン美術館蔵)